

障害児に対する、身近な小楽器による表現を促すための活動（第一報：リコーダー）

—リコーダーを鳴らす事の出来ない子どもに対する、

音出しを促進する働きかけの工夫及び「活動の段階表」—
(文中 Th.はセラピスト、Cl.はクライアント、<>内は曲名を表す)

MGW研究所 都築裕治

【はじめに】 発達には「縦の発達」と「横の発達」という概念があるが、Cl.の現在持っている力の使いどころをそのCl.に応じて創出し提供することもTh.の役割であろう。セッションにおいては、Cl.の音表現をTh.が受け止め“やりとり”を促してゆくことが肝要であるが、Cl.の力の使いどころを広げるためには、その音出しそのものについてもCl.に応じた工夫が必要であり（横の発達への配慮）、さらにその活動が成立するための段階をつかんでおくことが不可欠である（縦の発達への配慮）。

筆者は、複数のCl.に対し横の広がりを用意したリコーダーを用いたさまざまな活動を工夫・実践しており、その活動事例における関わりや経過を検討することで“リコーダー活動の段階表”作成を行った。それを活動事例とともに報告（ビデオも併用）し、Cl.の音出し表現を促すための一資料に資したい。

【対象者】 知的障害を持つ5才〜23才、32名。
自閉症・ダウン症等。

【方法】 Cl.の状態に応じて、以下の働きかけを行った。

1. フェエを吹くということが分からないCl.への働きかけ

- (1)息使いをCl.の目に見える形に変える方法(巻き笛等の利用)。
- (2)Cl.の息使いに合わせた、“吹く・吸う”両用笛での働きかけ。
- (3)Cl.の息づかいをよく観察し、息を吸ったすぐ後の息を吐くタイミングに合わせて歌口をCl.の口元に持ってゆく方法。

2. リコーダーを吹くことを促す方法

- (1)ピアノやリコーダーによるエコー技法。
- (2)選曲の工夫による未解決技法の導入。
- (3)パターンの利用（“ポッポー”で吹く等）。

3. リコーダー操作の負担を軽くする工夫による働きかけ

- (1)粘着テープで穴をふさぎ、ある一音のみが出る笛をつくり、それをトーンチャイムのような単音楽器として使用する方法。
- (2)粘着テープで上部（左手部分）の穴をふさいだ笛による方法。

【結果】 上記の働きかけにより、Cl.それぞれの形でのリコーダーによる音出しが促された。これらを整理し以下の段階表を得た。

[リコーダー吹き活動の段階表]

A 鳴らせない

1. 吹くことをしない
 - (1) 口元にもって行かない
(or、Th.がCl.の口元へ笛を持って行くと、それを避ける)
 - (2) 口元にもって行く
 - ① しゃぶるor噛む対象として
 - ② 持ってゆく仕草のみで吹かない
 - ③ 意図的に口にもって行くが吹くことはしない
(その際、何らかの音を出している一笛吹きのみ“つもり行動”)

2. 吹こうとする

- (1) 吹くが、音が出ない
- (2) 偶然、音の出ることがある

B 鳴らせる

1. 口元を持ってこれれば、その時は吹き鳴らす
2. ピアノとのエコーに反応する
3. <縦割は続くよ・・・>の“ポッポー”のところ等で鳴らせる
4. Th.の働きかけのつとで鳴らせる

5. 音節吹きが可能（歌詞のリズム型をなぞっているような音出し）

- (1) 息の調節が不得手（ビィビィと不随こかん高い音が出たりする・時々、音かどぎれる）
- (2) 連続した音出しが可能

① ♪♪は不可 ② ♪♪も可

- (3) 息の調節が可能（フレーズ感を持っている）

C 指の操作をする

1. “つもり行動”としての指使い

- (1) 穴と指とが対応していない（リコーダー上で指を動かしている）
- (2) 穴を意識して指を穴に持ってゆく（デタラメな指使いだが）
- (3) 穴を指でふさげる（デタラメな指使いだが）

2. 粘着テープで穴を制限したリコーダーの導入

- (1) ex: <ロンドン橋>（ミ・ファ・ソ）
- (2) ex: <ひげじいさん>（ド〜ソド）

この段階表はCl.のみで演奏することは対象外。それ以前の段階であり（C-2は別）、穴の操作はTh.が行う。

【考察】

1. Cl.に対する働きかけ、段階表作成の作業を通して以下のことが見出された。

- (1)他の楽器での活動と同様、Cl.の発達段階によりエコー技法、呼びかけ技法、未解決技法が有効であり、プレバール等のCl.に対して“やりとり”の道具を横に広げることにつながる。
- (2)二人羽織技法により、Cl.がその曲の特徴をどのように認知しているかが吹き方から分かる（外からの観察が可能）。

ex: 歌詞を歌えない、メロディーとしての口ずさみがないCl.

でも、<カエルの歌>の時にピィッ・ピ、ズン・チャッというような強弱 or 高低の感じで、あたかもピアノの伴奏型をなぞっているような吹き方をしているCl.がいる

（“二人羽織技法”：ある操作を二人で行うこと。筆者が命名）

- (3) 発音・発語との関係。

① 曲の特徴を認知していると音節吹きが可能

ex: <ロンドン橋>での「おっ・こち・た」のような部分では、他の部分に比して音が明瞭に出されることが多い。

② 発音・発語がしっかりしていると、音節吹き（歌詞をなぞっているような音出し）が可能。

このことから、このようなリコーダーでの活動による不明瞭な発音の改善といった発音・発語指導への展開も示唆される。

2. さて、Cl.の持てる力で思わぬ「表現」が出来たとき、Cl.にとつての喜びは大きいであろう。Cl.の出した音にエコー技法等でフィードバックし、“やりとり”としての意味を与えダイアログに持ってゆく等の戦略があるが、筆者はその際Cl.とTh.をつなぐ小道具としてリコーダー・鍵盤ハーモニカといった身近で簡易な楽器を使うことが多い。いずれもCl.とTh.とが身近で向き合う体型（関係）をとることが出来、Cl.の比較的単純な操作に対してTh.がある種の操作を加えることにより（“二人羽織技法”）、メロディーやコードといったまとまった情報をCl.は手にすることが出来る。これは、Cl.にとつての成功報酬となり、その活動をさらに続けるための動機付けとなっている。

【終わりに】 その時のCl.の持てる力は同じでも、活動で使用する“道具”と“使用法”を工夫することにより、Cl.の表現出来るもの、受け取るものが変化する。それらの工夫はCl.の状態（発達段階・能力等）に応じて行われるべきものであり、いくら丁寧な関わりをしたつもりでもCl.の状態にそわなければ意味がない。

この活動段階表は、Cl.の状態にそつた活動を考える際の「縦の見取り図」としてTh.にその手がかりを与えるものであり、それぞれの位置を見極め「横への展開」をはかって行きたい。